WASON
HQ
1104
J74

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

明治二十年七月廿三日刊行

每土曜日發兌
一冊正價五錢
府內無郵送稅

第六十八號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI)

No. 68. July 23rd, 1887.

第六十八號

EDITORIAL: — Summer Bacation in Rural Places.
LEADING ARTICLE: — Women's Meeting, by Mrs. T. Nakashima; Ladies' Educational Union, by Prof. B. Yatabe; Woman and Hygine, by Dr. K. Takagi.
MISCELLANIES: —Woman as an Inventor; Japanese Literature (Poetry), by Mr. H. Sudzaki.
CRITICAL NOTICE: —"Ladies of New Style" (Shin-so-no-kajin) by Mr. N. Sudo.
BIOGRAPHIES: —Sarah Martin.
NOVEL: —"Fragrant Rose": No. III.
CORRESPONDENCES.
GENERAL NEWS.

●社説　避暑の遊を勧む
●論説　(特別寄書)婦人の會合(中島とし子)婦人教育談話會(矢田部良吉君)女子と衛生(高木兼寛君)
●叢話　女子の發明力○和文學講義和歌の事(鈴木弘恭君)
●批評　新粧の佳人
●佳傳　サラマーテン四人を教育したる事
●小説　薔薇の香第三回
●寄書　東洋英和女學校閉校式(徳田春子)女學雑誌の解停を祝す(渡邊こう子)
●新報　二十件　●廣告

●事物の起元

○裃の始　三百十五年前天正元年松平彈正少弼久秀はじめて素袍の袖を切り長袴の裾をちゞめて畧服の禮服とせり

○呉服の始　千五百九十五年前十六代應神天皇十四年呉の國よりクレハドリアヤハドリと云へる二人の女を召て機を織らしめ初て其業を習ひ傳へしとあり呉の人織初めしゆへ呉服と云ふあり呉の國とハ今の支那國あり

○結髪の始　千二百〇七年前四十代天武天皇白鳳十年男女初て髪を結ひしとあり因てうるし塗りの冠を着す其以前は織物縫もの或ハ錦の冠を着せしと云ふ

○人形の始　千八百七十一年前垂仁天皇二十八年天の穗日命の後胤野見の宿禰土を以て人形をつくり殉死のかハりとして墓に埋む天皇大に喜び玉ひ野見の宿禰に土師の性を賜ふ是れ人形の始め亦陶器の初あり

○舞臺の初　千二百九十八年前推古天皇廿年百濟國味摩之と云ふ人呉の國に渡り伎樂を習ひ來朝して大和國十市郡に住し里の童を集めて樂を敎ゆ之を舞臺と名けたり

○歌舞伎始　二百八十年前慶長十二年江戸に於て出雲のお國と云ふ女始めて歌舞伎を興行せり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第六十八號

明治二十年七月廿三日

●社説

○避暑の遊を勸む

此頃は暑さ殊の外强うなり府下にても人家稠密の内に住ふ者は分けて其熱に堪がたく一日うつら〳〵として何事もせず暮す如し彼の空氣清く風すゞしく樹陰青々として草も靜なる邊に遊んで心の鬱を散ずるに適當の時とハ實に此の頃の事にてあるべし。凡そ一日には夜と晝とあり一年には冬と夏とありて晝の間だ働たるものハ夜必ず休み春榮へたるものハ冬必ず藏るゝことにて是非勞と休みとが順番に參らんければならぬものである。故に年中わくせくとして家業なり學文なりに勉强を爲されたる方々はどうか此の苦しき熱さの時節を利用して何處か涼しひ樂しひ場所に遊んで一つには疲れ切つたる躰を息め又一つには他日大に働かんが爲に先づ其力を養ハれたきものである。然るに凡そ遊と云へる文字ハ甚だ聞苦しひ者で誰にも何か榮耀がましく思ハるゝよりして之を試る方々は何となう遠慮さるゝやの趣なれども之は必竟遊と云へるものに甚だ大切の効能あることを御存知ないよりの誤りである。今ま小學校に參つて見るに課業の時間々々に十分程の休がある其時の鐘が鳴ると小供等ハ喜び勇んで運動場に駈け出で勝手氣儘の事をして遊ぶことなるが抑も此遊ハ何の譯に必要でありませうや若し遊と云へることは甚だ聞へが宜くないと申して万一之を止て見ませうならバ小供は乍ち課業に厭き果て半日にして全く疲れ切ることならん斯て稽古も出來ません躰も痛んで大したる損害を起すことであらう故に時間々々の遊ハ外見に無益の樣なものであつて其實大層に必要なるものである。かの亦た夏休と云つて大抵八月九月の頃二ヶ月ほども休むことが此頃は何處の學校にも行ハるゝことなるが之も亦た恰度前申したるに均しひものである眞に勉强盛りの少年子弟にハ一日の損をさせても一生の上に莫大の損となることゆへ決して無用の遊などを致さすまじきものと定て居る處なるに斯く何處に於ても久しひ休を爲さするハ實に夫れ丈の効能がなくては誰も敢て爲すものでハない然るに我國初め西洋諸國にても之等の休を甚だ大切と致し如何なる學校にても斯る休息を爲させない處のないのみか特に西洋の大學校に於てハ一年の內半年ハ大抵休だと申しても宜しい程であるが之れ必竟みなこの休が平生の勉强に大いなる關係を及ぼし其効能非常なることを承知す

るからの譯にてあるなり」偖て斯くも勉强ざかりの書生に休むと申すことが怪しうないことにてあらバ今日事業に勉强して居らるゝ最早老朽に近づかんとする人々に取てのみハ何故閑へが宜うあるまじきや甚だ聞取りにくきことにてハなきか思ふに若しも此人々がかの少年子弟と同樣に勉强の時ハ心限り勉强して置て偖て年に幾十日と云へる間の休息を爲したるならバ定て其身躰も丈夫になり其精神も活潑になりて大なる利益の在ることならん三四十日の休息ハ目前にこそ大層の損亡の樣に見ゆるとも之を大きく勘定して見たらんにハ其益あること確實にして決して疑ふべきものでハない。故に彼の利を見るに賢こき西洋の商人等も一週間の一日即ち日曜日を安息日として商賣を休み何事も致さない又年に一二ヶ月ハ夏休と申して閑靜の地に避暑し身躰を養ひ年中の勞を慰ることである。故に休、遊、安息、など云へる事の効能を知らざる人ハ即ち小學校の運動時間を無益のように思ふものと同樣の誤に陥りたるものである。

且又此の休と云へるものハ必ずしも何事もせずブラリとして居ると云ふものではない即ち小學校にてハ小供が好み〳〵の運動を爲し大學校の書生ならバ所々に遊歷など致して經驗を積み或ハ草木魚介を採りて博物の智識を増すやうのことを致す必竟ハ爲し續けたる仕事を中止して心を他の方角に轉じ暫く氣を息むると申すことが大切である例へバ何方でも一の事を引續て久しく爲さるならバ必ず厭が來てホト〳〵忌になりませう然るに若し之を忍んで尙ほ續くるならバ頭は痛む氣は屈する何か躰内にムラ〳〵としたる雲を生じたる樣の心地して甚だ疲勞するのみか其仕事は少しも捗取らぬものであらうが然し若し之を善い程に中止し一寸香茶を飮むとか又は庭を散歩して草木を眺るとか致して暫時氣を轉じて偖て又前の事を致さるゝならバ精神ハ常も活々として仕事は大層に進歩するものであらう今ま吾人が時々に休、遊、安息などすることを主張するは即ち亦此變化と云へることを爲さうとの主意よりして申すことである。然れバ事業を爲さるゝ人々が例へば夏休三四十日の間閑靜なる地に行て遊バるゝとしても何も一日悉く休まねバ其効能が無いと申すことハない既に變りたる地へ行たと云ふ事、此迄の仕事を暫時中止したと云ふ事、四方の景色が變り往來する人々が違つたと云ふこと計りで早や莫大の効能がある、故に避暑の地に行て相應の仕事を爲すも又年中何か仕事を貯へて置て偖て此時に之を爲すと申すやうに致されても身に受

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る所の利益は既に莫大のものである。扨て右に申す常々の有様より變化したる事を致すと云へるは分けて女方にとりて大切の事なるが故に其効能の及ぶとも亦特に女方に多きものである之を何故と云ふに凡そ男子は日々の仕事の間に多少の變化と云へるとがあつて或は車を飛ばせ或は馬に跨り或は急に滊車に打乘つて横濱の取引に出向き又は急かに滊船に乘じて京大坂の用事を辨ずるともある左なきだに日々世間にて無數の他人に出で會ひ談笑の間に愉快を覺ゆるとが必ずある其仕事の活潑なるに隨て變化も亦甚だ多いものであるが彼の細君娘孃方に至ては大抵全く此樣の事がない先づ一家を修むるとか又は母を助るとか申して日々同樣の事計り致すとである朝起て夜臥するまでフキ掃除より裁縫洗濯に至るまで殆んど一轍の仕事を日々繰り反へすのみか出であふ所の人も毎日決して變はりがない云はゞ女方の爲さるゝとは年中殆んど一調子の音を發する音樂の如きものなりと申しても宜しひ固より當今の婦人方は或は時々の宴會にも出でらるゝ又時々の散歩をも爲さるゝ決して昔日の比ひではないが男子の人々と比べて見て何れが多く仕事の變化に出あはるゝやと云はば無論女方は男子に及ばんものである然れば其時の休息を要して彼の景色を變化すると云ふとの必要は亦ろれ丈に女方に多く入用のものである。然るに近來避暑の効能を知つて遊びに出向かるゝ方々年々に多くなるように覺ゆるが中にも夫のみ獨り參つて細君等は矢張り家に留守番をせらるゝと云ふが多くある如し眞に譯の分らぬとにてドウカ其樣なる不心得は向後全廢し可成夫婦同行さるゝように致したいものである左すれば啻に双方平生の疲を慰めて前に申したるようの効能がある計りではない或は樹陰蒼々たる邊に手を携へて散歩し或は連山起伏し明河布を渡せるようなる景色を望んで共に來し方を語りなどせば互ひの愛情も無限の點に達し尚更に非常の愉快を覺ゆるとにてあるべし。

偖て休、遊、など云へる者に斯く効能が多いとならば此の炎熱に苦しみ乍ら府下に留るに及ばず何卒避暑の計を立てゝ早く遠行ありたきものなり經濟上の事を申ても素と湯治場に榮耀なる暮し方をするとさへ思はず片田舍に茅屋を借り受て暫時之に住ふとだに致さば決して多くの入費は入らぬものなり故に凡そ平生中等以上の生計を爲さるゝ人々は何卒多く此の避暑の遊を試みらるゝやうに致したし若又一家擧つて參られぬとならば此時こそ夫たるものが家に留守して細君や娘方を

ば出向かせ年中家に留守して鬱し易かりし心根をば慰めしむべし是れ切めてその年中の勞に報ゆると云へる男子の覺悟なるべし

●論說

○特別寄書(婦人の會合)

中島俊子

各其名は異なれど婦人の會合すべき會の處々に起りしは誠に賀すべきの事なりき然しながら隴を得て蜀を望むは普通の人情なれば是等の會をして虛名のみを保たしめず實益を有たしめ義務のみを感しめず快樂をも感ぜしめん事を望めり余都ての會を知るものにはあらざれば中には實益と快樂とを經緯して成立ものもあるならんが余いまだ不幸にして夫等の會に至りし事あらず余稀に會塲に至りては常に物足らぬ思を爲さゞる事は絕てあらざるなり先其會塲に來りし婦人は微睇を以て坐敷を見廻し何の處へ坐を執るが適當なるかを案ずるもの﹅如くして既に坐に就く處のものは頭を擧て扨不思議なものが來りしとでも云はんずる風色あり夫より一同坐に就て後は殆んど唯禿髮が束髮と違ひ黑き衣が彩ある袖と違ふばかり殆んど僧侶の禪堂に默坐するもの﹅如し其中一二螢火の暗夜に飛揚するもの﹅如く僻隅には達しかねる微かなる聲音を以て會合せし旨趣を陳了りて茶菓を出すが例なるの會は皆各其茶菓を前に控へ思を四隣に運び一身を措くに處なく恥かしく思ひ玉ふ方は唯一隨に歸るべき機會の至らんを待もの﹅如し又年長てはなしをも能く爲し玉ふ方は唯己の知るものとのみ相語ふもの﹅如しかくては會に就ての實益と會に就ての快樂とは甚幽微なるもの﹅如きを奈何せん唯多人數の會合のみならず相往來する友人と友人との間にも聊か右に述し氣味なしと言べからず是なん他なし唯互に氣張合の原因ならん友人と友人とが出會にも其初玄關より坐鋪に通り時候の挨拶より後歸るを告るまでかく問ば咲れんかかく問ば咲はれんかと始終安き心なき有樣は既に一方にも反射して終には相方默戒を守る事とはなれり

既に友人たる以上は互に相氣張合を廢隔意なく可成己が知ぬ事を問はん考となり又問はれもせば可成知る事は答なぞする考となれば互に打解て樂しき交りと變するを待へし問方は人に咲はれんかなどの考を起すものあるが答る方に取りては毫も問人の如き考を有すして唯心易き親き思を爲ものなるべし此の如くして一二人の交際より多人數の會合に及ぼさしめ

ば僧侶の禪堂も俄かに百花馥郁の芳園と變して麗しき實菓を結ふに至るべし

○東京婦人敎育談話會

大學敎授矢田部良吉演説
若林玵藏筆記

御婦人方、私ハ今日此處に出まして御話して呉れと云ふ御頼みが御座り升たが最初にハ御斷を致し升た然か志能く考へて見ますれば折角の御頼みで御座りますからして御斷りをして仕舞ふのも不本意の至りと考へますから不肖ながら御受を致すとにありました併ながら私の樣な未熟の者があなた方に向て御饒舌を致した處で所謂釋迦に説法で御座りますから何の御役にも立ますまいが私が實に良いと思ふ事がありますから其事を一寸申上ます暫時御聽下された其上で御問下されバ宜しいと思ひます

私ハ此會ハ箇樣な會でハなからうと思て居りました一緒に互ひに話をする處であると思て居りました其會場も小石川のお寺で小さな會と思て居りました處が今日見た處大變大きな演説會で其處へ出て眞黒の棒の樣な奴が出て來て饒舌るのでありますから私の考へとハ違ひます若し箇樣な演説會と知れバ私も演説の仕樣もありましたが唯自由に易く御話する考へてした故考が違ひました故に唯座て易く御話する考へで一寸旨意だけ書て置きましたから大に考へが違ひます併し今演説を設けてするのもどうかと思ひますから止めて置きます

それであなた方が箇樣な集會を爲さるのハ元とより良い目的がありませう併し私の推察致します處でハあなた方即ち婦人の地位を高く仕樣と云ふのが目的の一ッであらうと思ひます元來日本でハ婦人と云へば男子より輕蔑して居ります左樣な習慣がありますから婦人の敎育ハ等閑にして置きますそれ故に婦人にハ學問のあり智識のある方ハ男子に比べて少數で御座ります近頃男子の敎育ハ益盛んになつてくるそれに從て男子と婦人の懸隔ハ甚だしくなつてくる婦人ハ元との儘で男子ハ益〻進み懸隔が甚だしくなつてきてそこで箇樣な譯でハいかんと云ふので婦人方が奮發されたものと見へる此頃ハ方〻へ女の學校が出來ますなか〳〵澤山出來ます此頃新聞に何女學校とか云ふのが出來ました年若の婦人ハ勿論嫁に行かれて子供の二、三人もある方が學校に通學せらる〻樣になりました又通學されない方でも自分の宅へ敎師を呼で學問をする方も亦自分でぼつ〳〵學問をする方も御座ります箇樣な時勢になりましたから箇樣な婦人を以て成立つ會も出來るとであらうと思ひます之れハ結好な事で我國の爲めに賀すべきとであら

うと思ひます婦人の位置を高くするには敎育が肝要であります敎育と云ふことは廣いことで色々なことで御座ります假令ば是れ迄婦人は裁縫のことを心得て居ります(稀には心得ない方もありますが)益裁縫を進めて日本服計りでなく西洋の仕立方を學ぶのも學問の一つであらうと思ひます

又婦人方は是れ迄書物を讀まれて文章を綴られてきたでありますが今一層語と云ふものを研究されて語を綴るとか又今一層宜い和歌を綴るのも宜しい又漢書を讀で四角の文字の大先生となるのも敎育の一部と云へば一部であらうと思ひます私は餘り望みませんが宜しいと思ひます又木寺君の云はれた衞生のことも敎育の一部で大切のことであらうと思ひます此外にも敎育の部に入るものは大層御座りますが私の考へます處では現今の有樣で婦人の敎育上最も大切なものゝ一つと云ふものは外國語であらうと思ひます

此外國語は婦人計り大切と云ふことはありません男子でも大切であると考へます私の此外國語と云ふのは英吉利、佛蘭西、獨乙等の歐羅巴の國を云ふので支那朝鮮を云ふのではありません昔は兎に角今日は外國語に通じて居らなければ充分に智識を得ることは迚も出來ません又婦人に充分の智識がなければ地位を高くすることは出來ません地位を高くするなれば智識を高くしなければなりません外國語學は理學、化學、衞生學の樣な人生に必要の學問を知る計りに必要ではありません兒童の敎育をするにも亦廣く交際するにも必要で御座ります外國語を知て居れば人に樂みがあります日本に類ひのない外國の小說を讀むことが出來ます又海外の樣子を精しく知るには外國語でなければなりません外國語を知らんで日本の樣に開化の進む國柄では何時でも人の嘲に付て居らなければなりません然うして何時でも人の嘲に付て居る樣なことでは云はゞ馬鹿者になって居るは決してきまりの宜いことではありません外國語と申しましても數があります其中でどの國の語が學ぶに一番宜しいかと云ふに英語が宜しからうと思ひますどうも其佛蘭西語杯は歐羅巴の上等社會で用ふる樣なことがありませうが私は英語が宜しいと思ひます英語は歐羅巴に廣く行はるゝのみならず日本には能く通じます又日本の婦人の智識は英語で得られます力もあり時も澤山あれば二箇國又は三箇國の外國語を學でも宜しいそれに越したことはないが一つの外國語に通じ樣と云ふことなら英語が宜しからうと思ひます

また英語の外にも婦人に學ばせて良いと思ふことは澤山ありま

すが其中で唱歌でありますが唱歌は隨分良いものかと思ひます尤も英語も唱歌も小學校の生徒は學ぶ可きとになつて居る樣で御座りますから生徒に對しては申しても益はありませんが私は學校に行かない奧樣方に對して云ふので御座ります私の申すのは重もに學校唱歌を云ふので御座ります若し耶蘇敎を信ずる方なれバ讚美歌を頌はれても宜しい奧樣方は已に子供のある方もありませう又晩かれ早かれ子供の出來るものであります(中には出來ない方もありますが大抵出來ます)然るに子供は歌を聽いたり自分で頌たりするとは大變好きで御座ります又歌を好くとは自然人間に具て居ります初めは「千ぞや万ぞお船がぎちこ」と云ふ樣なとを云ひますあヽ云ふとを聽せても宜しいが初めは「風車」とか「見わたせば」と云ふ樣なものを敎へれば宜しい然し是れ迄の樣に「紅葉」「宵は侍ち」杯を敎へるのは宜しくないと私は思ひますそれ故に奧樣方は極少しでも宜しいが勉强して學校の唱歌を學で置かるヽは子供を育てながらどの位樂みになるか知れません又奧樣は成る可く「オルガン」の彈き方を學で置かるヽが宜しい「オルガン」と云ても決して立派なものを求めるに及ばん近頃は東京で直段が安く隨分使はれるのが出來ます共進會でも評判が宜かつた此安い「オルガン」を備へて置けば事足ると思ひます尤も立派な「オルガン」を御望みなれば外國へ注文なされば直ぐ出來ます日本の奧さん方は大變御器用でありますから學校の唱歌や「オルガン」杯を少しく御勉强なされば覺へるとは容易であらうと思ひます子供が追々大きくなつて唱歌が一と通り出來る樣になり家内中擧て「オルガン」を彈き唱歌を頌ふ樣になれば家内の樂みはどの位增すか知れません日本の琴も至極上品で宜しう御座りますが琴歌の如きは學校唱歌の樣に易ひものではありません餘程年季を入れなければ聽き良い樣になりません箇樣なとは誰にも勸めるとは出來ません誰れでも出來るものは學校の唱歌が宜しからうと思ひます少しく(少しくではない大層)お恥かしい話しで御座りますが私も此事に關係があります調子外れのでくいんが打てありますが一、二年前から年寄仲間を集めて實は唱歌の稽古を初めました其進みの遲きとは闇夜の牛に負けない又聲の美いとも闇夜の牛に負けない併しながら又屈しないとも牛に負けないで「大和なでしこ」「螢の光り」位は出來る樣にならうと思ひます私の如き者でも一世一代の勇氣を奮て唱歌を習ひますから奧樣方に出來ないと云ふとはなからうと思ひます已に御熟達の方も御

座りませう其様な方には箇様なることを申すには及びませんが若しお初めにならぬとなれば至て易ひとでありますから一日も早くおやりになる様に翼望致します

此二つの事は今日一寸あなた方に御話し申さうと思たとて御座ります甚だ詰らない話しで御座りましてあなた方に向て御話しする丈けの價値は御座りませんが若し御同意なれば御傳へ下さる様に偏に願ひます

○女子と衛生（其三）

海軍々醫總監　高木兼寛　演説　林茂淳　筆記

其の次には裁縫方のことです。先づ第一に今日の御婦人方の着てお出てなさる着物は宜しいかと云ふに宜しく無いと云はなければなりませぬ。先づコンナ長い袖が附いて居ますが、未た曾て日本の着物を見たことの無者に見せて「これは如何なる動物の着物だ」と聞きましたら「袖は四角張た龜のウデみたやうなものを入れる爲めだらう」と云ひませう。其れから足の方を見ると下の方は二つになッて居るだらうか一つになッて居るだらうかと問ひましたら足が二つ有りさうには申しますまひ理窟上から考へて見れば先づソンナもので有ります。しかし日本にてもタチツケとか股引とか云ふやうなものはさうで御坐りませぬが其等のことは委敷申せば長くなりますから申しませぬ。

此様に太ひ袖の着物が仕事をするにドウかと云ふに悪いです昔しのサムライがイクサダチするときはドウであつたかと云ふに袖の方もからげて足の方も分れさせて居りました。今日仕事をするには大きな袖の着物を着たる人はタスキをかけるです。左官とか鳶人足とか云ふやうな活潑に仕事をする者の着物は大抵筒袖です。其れで大きな袖付の着物を着れば仕事の邪魔になりますからタスキをかけなければならないと云ふことは昔より日本の人も知ッて居ります。たゞては無害のやうでありますが生れた時から死ぬ時までには衛生上にも經濟上にも大層損が有るです。

先づタスキと云ふものはドウして出來るものかと云ふとナーニアレッパカリ五厘か一錢だと云ふでせう。ナルホド五厘か一錢で買へませうが日本の人が三千七百萬あるとして其半分の人が之を用ゆるとすれば其數一千八百五十萬ばかりのタスキが入ると、御覽なさい、實に大變なものではありませぬか一錢づゝでも一千八百五十萬錢即ち八萬五千圓ですがこれは何にあるかと云と贅譯でも無ければ何でも無ッマラヌもので無

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

くてい丶ものを骨を折つて用ひて居るのです。絹ならば桑畑を仕付け蠶を飼ひ其れから段々と色々の手數をかけ、又木綿にしても畑に綿を作つて色々と手數をかけなければなりませぬ尤もタスキには縄のも有りませうし麻縄のも有りませうが大抵ハ木綿で少し贅澤な者だと絹で拵へます。桑畑を作つたり何かして無くてい丶ものを拵へるのハ實にドウでせう。無くてよければ、やめたらドウです。タスキをかけるにハまた時が入ります。アナタ方ハ平均五十年ハ生きませぬ。一遍失つた時ハ取り返すことハ出來ませぬ。實に貴い時で有るが其の貴い時をタスキをかける爲めに、どの位ゐ費しませうか。其れハお驗しになつた方ハ有りますまいが今年の一月西京で高等女學校の生徒が體操をしたときに號令をかけて「ヨーイ」と云ふと一所にタスキをかけるので有りましたがタスキをかける時間が五秒時ばかりかゝりました。五秒時を一千八百五十萬よすれば千〇廿九日となりますが實に大變でハありませぬか。其れを何にもならぬようにしてしまふのハ實に惜いとです。またタスキをかける爲めに時を費すばかりで無くタスキの置き所を忘れて探したり何かする時間ハ五秒どころでハ無い「タスキはドコへ置ひたらう、こゝにも無い、アスコにも無い」と云て二階の隅まで探しても無いとか簞笥の向ふに落ちて居たとかして其を探したり出したりするにハ中々一分や二分でハ出來ませぬ。ただ大きな袖の有る爲めに一千八百五十萬と云ふやうな大層なタスキを拵へたり、また其れをかけたり外したり無くしたり探したりする爲めに大事な時を費すのハ實に大變なムダです。國が貧乏ですから成るたけ使はむでい丶所にハ使はぬやうにしなければなりませぬ。

其の上に袖に付てはモウ一つ言はなければならぬことが有ります。着物の袖は筒袖と廣袖と二つ有りますが廣袖の方だと手が三つ四つ這入つてもあまりあります。廣袖即ち大きな袖の着物ハ三千七百萬の人が皆な着ると云つてもい丶位です。銘々一枚と見ても三千七百萬ですが一人で少なくも二つやッコイラは持つて居ると見ても宜しいと思ひます筒袖にすれば大袖一つで二ツの筒袖を作る事が充分出來ますれば一人につき一枚づ丶とするも一千八百五十萬の袖之を反物に直せば大凡四百拾壹萬一千一百拾壹反です是程多數の反物を身體にハ害を爲し經濟上にハ大損をなすにもかゝはらず皆さんが其儘置きなさるハ實にサッパリ分りませぬドウかやめるやうにしたいものです。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其れから今度は着物の下の方です。胴は日本の胴でも宜しいが可笑いのは一つの筒を拵へて足を二本入れて居ることです。充分にあるくには足を妨げぬやうにしなければならぬ所が大抵皆さんが召してゐらっしゃるのは足のアガキを大層に妨げます。外國の人の着物のやうに足の所が二つに分れて居ればアルクことがヨホド樂に出來ます。夫故に外國風の着物を着た人が十丁あるくのと日本風の着物で五丁あるくのと同じ位の勞が出ます。

其れて皆さんがお分りでなくばこゝにお出での外國の婦人方と一所におあるきなさるとよく分ります。外國の婦人方は遠方まで歩て行くことが出來ますが皆さん方がさうで無いのは着物の拵へ方が惡いのです。其れはマルデ縛ッた同樣でこゝの所〔腰〕をしめた上に、こゝが丁度かう云ふ風になりませう〔手巾を以て膝の下を縛る〕からなるからアルキツキが惡くなります〔大笑〕。アナタ方の身になって見るとアルキツキが惡いなどと云はれるのはイヤでせう。これでドウしてあるけませう〔手巾を以て膝の下を縛りしまゝにてあるく〕。其れですから急ぐとかうなりませう〔歩行の困難なる狀を示す〕。これで無いやうにしやうと思ふと前がまくれていけない。と云ふとかうあるので〔再たび歩行の困難なる狀を示す〕(大笑)とりも直さず足に綱を附けて居るやうなものです。其れですから二つの筒の着物で道を十丁あるくのと日本の着物で五町あるくのと同じ位ですから婦人方も勢ひ車に乗りたいと云ふやうになります。從ッて運動を妨げ段々身體が弱くなりますから一つの筒にしておいてはいけませぬと云ふ私の考へです(夫完)

●叢話

○婦女子の發明力

男子は剛毅に走り易く女子は感情に溺れ易し既に知られたる事を強く主張するは女流が得意とする所にして未だ無き事件を考へ出すは男子特有の長所なり然れば新事物を發明するの力は多く男子の一手に屬して女子は甚だ此力を欠くとぞ云へる事は近來一般に定まりたる所の輿論なるが如し故に女權擴張を以て其任とする論者と雖も倘ほ大抵此理由を贊成するの有樣なるが此は素と半ば理ありて半ば理なきの議論ならん然れど吾人は今ま茲に其可否を議するをせず只だ近來米國にて取調べたる統計表によりて婦女子も亦た發明の力に乏しからざるの實證を示すべし

今を距る十七年の昔し一千八百七十一年と云ふ比ろより米國合衆國の專賣特許局雛形陳列所の取締を爲せるギル氏と云へるは其任を盡して勤務拔群なるが上に近頃官の餘暇を以て編輯ありたる女子發明品の調査は斯道にとりて著大ある功能を及ぼしたり吾人が右に序言したるは則ち此事にて之か爲めに第一婦人も亦た有益なる數多の發明を爲したる事第二此發明は決して裁縫調理等の途に關するもののみに限らざる事第三發明の能力は婦女子の亦た十分に之を所有する事と云へる以上三條の理由を明示するに至りたりとぞ

偖てギル氏の調査する所に據れば合衆國に專賣特許局を置きたるの初より去年十二月十四日に至る迄の間に於て婦女子に專賣特許狀を與へたるもの總じて一千九百三十五あり此內最初の發明として特許狀を得たるは即ち一千八百〇九年マリーカイスが生糸を以て藁を編むの工夫を考出したる技術にして其后千八百廿一年には帽子帽衣につきての發明あり翌廿二年にはストーブ足臺につきての工夫あり同じく廿五年には足靴の類に付き同廿八年には帽子藁漂白の術に付き同卅一年には地理學教授用の地球儀に付き同卅四年には乳草の纎緯を以て織物製造の工夫に付き同四十一年にはコーセット新式の品に付きてそれ〳〵專賣特許狀を得たり斯て千八百五十年となりては十三人同六十年となりては二百十六人同七十六年となりては一百三十六人同八十六年には一百六十九人の發明女あるに至りたりとぞ

斯て此の發明女の中には海中望遠鏡を工夫したるもあり鐵道滊車の響を靜むるの工夫をなせるもあり運轉車を自由にするの方を考へ出せるもあり防火保險の術を案したるもあり又は蜜蜂飼養の諸器械を製造したるもあり病院內の諸用品を新規に造りたるいろ〳〵の發明もあり千種万多にしてなか〳〵に容易の發明にあらず世人が想像する如くたゞいさゝかの工夫に專賣の免許發明の名譽を博し得たるにはあらざる也然ればギル氏が此の調査は婦女子に對する輿論一般の取扱を全く變じ得るの力あるものとして慶賀すべきもの也

因に云ふ當今英米にて發兌する每週の女學雜誌を見るに大抵每號には九人づゝの發明女を載す

○和文學講義

鈴木弘恭述

第五回　和歌の事

既に前回に於て詠歌の事をも一と通り述べたれば歌はかやうにしてよむべきものぞといふことは貴孃等皆合點し玉へるなるべし是より詞辭用格のことをいはんと思へどもこれは後回に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

譲りて本回ハ先哲等が歌の上に付ていはれたる評論どものあるを其の大意を搔摘て貴孃等に示さんと欲するなりさて余が是まで歌は造作もなきものなりなんでもかでも三十一字になれば歌なりといひしは貴孃等をして俄然に歌を詠まんとする心を振起せしむる方便なりき然るに果して貴孃等まだ日も淺きに競ひて續々と詠出玉へるは余に於て甚だ滿足なり啻滿足のみならず其の進歩の速なるにも亦驚きたれどこれ驚くべきに非ず貴孃等が非常の勉强より著はれたる成績なりと甚だ喜ばしく思ふなりさて貴孃等はかく進歩し玉へれば是よりは歌はたゞ其の言葉を三十一字に綴ればよしとのみ思はずして少しよき歌を詠出る工夫をもし玉ふべしよき歌をよまんには人の歌の評論をも辨へ知るべきとなれば左に其事をいふべし倂蒿蹊の說に歌のやすらかなりといふ躰はたれもよき事といふべきを其病はよわきに落つべし又たくみなりといふは力のみゆるものあれども其病は心得られぬに落つべしといはれたり是れ實にさることなり余が歌は古今集を學ぶべしと既にいへるも易らかにして力のある所をいふなり然るにその力のある所を學ばずしてたゞ易らかなる表面をのみ學ぶときは歌の調弱くして更にみるところなし又新古今集の如きたくみなる歌を初心のうちより學ばんとするときは譯も分らぬ歌のみ出來ぬべしよく注意すべきことなり

荒木田久老の論に定家卿の「見わたせば花ももみぢもなかりけりうらのとまやの秋の夕ぐれ」とある歌を本居宣長が三四の句を加へて「見わたせば花ももみぢもなにはがたあしのとまやの秋の夕ぐれ」とあらまほしといはれたるはなか〳〵にひがことなり此歌なかりけりとつよくいひすてたる所に風致ありて浦のとまやのさびしさも見るが如く身にしみていとめでたきを宣長の說の如くにてはいとよわく一首の風致もなしといはれたり是れ余が前回に歌は虛飾を用ゐるべからず然れどもことをつよくいはんとするときは意外の事をいふ例も多くありといへるは即ち是なり

村田春海云題を設けて歌よむことは後の世のことなり堀川の御時よりこのかた世々に題詠さかりになりたれども今では即ち歌をよむはしだてなり專ら古を慕ふ人とても此のはしだてを踏ずしてはいづれの道よりゆくべきぞ然るを我は古に從ふべし題詠は後のものなれば從ひがたしといふは能くもことわりを知らぬ人なりといへるは實に確論なり古の歌は余れ前々回にもいへるが如く今の如くに題を設けてよむにはあらず

心に思ふことを口にいふまでのことなりき然れども後世になりては題を設けて歌をよむことゝなりたるは歌を稽古するには尤も便利なれば春海翁もかくいへるなり

契沖阿闍梨の歌の論に古の歌はたとへば畫師ならぬ人の堪能あるが用ある時かける畫の如し後の歌は畫師のかけるが如しよけれども心より起れるはまれなり冬の畫をかけるに見る人をして寒からしめ夏の畫をかけるに見る人すゞしくおぼえんをば上手といふべきか歌もそのたましひをこめたらんには古人につげりといふべしといはれたり是れ余が前回に歌は虚飾なく正直に見聞のまゝをよむべしといひしは此の意なり正直に實情實景を述べたる歌は實に人の心を感ぜしむるものなり貴孃等ことに此所に注意すべし

村田春海が歌話に云古今集の頃なる歌は須磨明石のゆほびかなる海面嵐山小倉のみねの花紅葉のをりにあひて目もあやなるがごとし古今より下りてはけしきはやゝおとりたれとなほ自からの海山なりかくて題詠の歌、もぱらとなりてよりは自づからなるまことの景色はうせて皆人の心もて作りなせる庭の如し心のおくれたる人は彼のたくみにつくりなしてある中島のありさま遣り水のやうす岩木の工合などの世に似ずおもしろきに目くらみて却て自然の海山にもまされりと思ふなるべしとあり味ひある論なり

又云後世の人の題を設けてこまやかによみ出たる歌はめづらかなる造花にうるはしきにほひを強てうつせるが如しそは古の歌はおのづからなる心のまことよりいで後の歌はわらぬことをあながちにもとめ出たる虚言なればなりいにしへの歌はあるがまゝをいひ出てをさなくはかなきが如くにして心深し後の歌は人の思ひよせぬふしをもとめ出てさかしくくまなきが如くなれど心淺し古の人は心をのべんとて詞をとゝのへ後の人は詞をまづつくりてそれがために心をもとむ古の人の詞をかざれるはことばつよくして品たかし後の人の詞をかざれるはことばよわく艶になまめきてさまいやしげなりなどかつ〴〵論じたれど今いさゝかぬき出て是をしめすなり貴孃等なほ勉强していま一層進歩したらんには高尚なる歌文の評論をも示さんと欲すれども今回は是を以て結尾とす

さて作文に付てのことはおのれが既に著はせる書種々あり此の中に如何なる初學にてもよく自得しやすきやうに俗言にて說示したるは文法口授といふもの一冊あり是は五六年前に男女生徒に敎授したりし時門人等が筆記したるものなるが今年

に至りて修正增補して女學雜誌社に於て再版せり此の書を見たらんにはいかなる初心にても自在に和文を作ることを得べしそれより高尚に至りては文話といふもの一冊あり是れ上古の古事記風土記祝詞宣命の文より中古の日記物語の文に至るまでその本文をいさゝかづゝ揭出して其の文法を論じたれば此の二部を以て足れりとす故にこゝに文法のことは省きたり貴孃等ハまづ文法口授を見て作文の事を悉皆さとり知り給ふべし本回はまづ是れまでとして後回よりハ詞辭用格のことを懇々に敎授すべし

○批評（第二十五回）

(31)　新粧の佳人（中本一册(三百六十二頁)定價六十五錢　發兌所東京南鍋町十八番地　正文堂）

此書は南翠外史と稱する須藤光暉氏が耳にのみ聞得たる二種の事柄を種とし更に我國若干年后の婦人の景況を想像して設けられたる小說なり思付の奇にして文章のあつさりとしたる時々讀手にヒヤリとしたる感動を與へてまた慨然志を起さするようの刺擊劑をも倶へたるなど改良小說中蓋し錚々たるものとして見るべし然るに夫の人物を畫く處往々精きに至らず個々に特別の氣性を現はすの筆力や乏きを覺ゆ故に健三とダイソス、和歌子と政江、浮田無腸と泉健三と相去る所幾干ぞや前野夫人は余程面白く書けそうなる人物にして一寸しか其性を見せず水本清は末に至て滔々と辨じたるのみ外に何の仕事も無しおちよは眞に感心の女なるがどうして此樣に感心の行が出來るやと疑ハしむる程なり但だ判然と分れたるハ前野氏の廣濶なると荻原宰相の小量なるに在れども然し此等はワキの人物にして大切の主手に少と說明が少な過るやうに思ハる但し之のみ慽とすべし全體の結構及び主旨の在る所は眞に驚服すべきもの多きとなり

●佳傳

○サラ、マーチン四人を敎育したる事（其二）

之を初めとしてマーチン女は日毎に其餘暇を竊みて此牢內に來り其時々聖書を讀み聞かせ又は淸よき談話などを仕掛けて豚の如き男女を敎へ導かんとするに此等の人々もと高尚なる慈善者の心を知るべきにあらねば或ハ面りマーチン女を罵り惡口して斯る談話をきゝて何の効能かあらんと云ひ或は耳を塞ぎ目を怒らし身を反けて之を輕ろしみ或は顚倒仰臥して餘の雜談をことさらに仕掛くるなど尋常の人にては固より忍ぶべからざる失敬の行のみを爲せど元來かゝる亂暴をなすものな

るが故に之を愍れみとするマーチン女はいよ〳〵之れを愍れみて少かも不平の面色なくたゞ〳〵信切温和に之を導きたり然れは初は日々の餘暇少々を以て來り敎ゆるとしたるを今は之にては足らざるやうに覺へて遂に一週間の一日を悉く牢内敎授の日と定むるに至りたり凡そ其身衣食に足りて且つ餘暇多からん人には此等の傳道も左程の働とは見ゆべからず然れどマーチン女はわづかの裁縫にやうやく其日の烟を立て寸刻の怠は直に其一身と老母との命を危くすべき程の有樣に居ては一週に一日の暇を作るは眞に容易からぬと知るべし

然るに之れ元と容易からぬを漸くにして爲すべき事となれば之が爲め其間幾度か困厄して自ら生計に苦しみたる折もあれど敢て自ら信じて疑ハずいよ〳〵其慈善の行に餘念あらざりしが後には老母の世を去りたると或る慈善の婦人が之も一週に一日と定めてマーチン女の裁縫の手助を爲されたると其外の人々より少々の寄附金及び聖書小冊子等を牢内傳道の爲にとて惠まれたる等の幸ありてやう〳〵に一身を支へ乍ら其志を貫かるゝことゝハなれり

左れば牢内の罪人等も後には追々マーチン女の敎に感じて毎日曜日には特更に安息日の集會を開き土床藁座に讚美の聲を發するに至りたり斯て三年の後には女囚先づ自ら仕事し次に男囚もまたそれ〳〵手業して昔日の如く罪惡の談話に全日を消するが如きとなし當時幸にして二人の紳士あり合して七圓餘の金を之が爲に寄附ありしかバ之を資本として少かばかりの反物を買ひ整へ數多の女囚にシャツ上衣などの仕立方を敎へ之を用て裁縫させたり其内男囚も亦た之に倣ふて或は藁の帽子を作り又骨を集めて匕の類を作る樣となり最早前の如く怠りてのみ居るものとてハあらざりけり

然るに獄を出でたる後ち適當の仕事あらざるより止を得ず再び不良の心を起すものもありと聞てマーチン女は更に此が出獄后の保護方をも考へ相知れる婦人方を説きすゝめて僅か計りの元資を得之を以て斯る人々等が職に就くの途をバ立てたりとぞ

斯る慈善の事に奔走しながら己が生計は眞に困難にして少かの餘裕だもなしたゞ手二つにて縫ひ立つる賃仕事を以て辛うじて身一つをバ支へたり而も其暮し向に必要なる丈けを仕立てゝ其餘暇はいつも獄内の傳道に費したれバ夜晩く茅屋に歸りて燭もなく床も冷かなるわび住に入りて一夜を明かし又起き出でゝは日も足らざる如く人の爲に苦辛せらる其志の潔白

にして高尚なる異に感ずるに堪たるべし然れど之を餘りの事と見て友人等より時々の贈り物など致すとあらんに若し之を慈善の事に御遣ひありたしとの一言に附して齎らすものにあらずば常も差し戻して受取るとなし當ては或る會よりして之に若干の金を與へんと申したるに無論斥けて請取らず然るにマーサン女の健康追々に害はれて兎ても例の如き辛苦を爲しては危うかるべしとて再び其申出しを爲し是非とも御受取ありたしと迫りたるに妾もし御會より金を受けて傳道いたさば獄内に働くは即ち妾が御會へ對するの義務と爲りて當に爲すべきの事を爲すの外なし斯ては囚人等が妾に對するの感じ悉く一變して最早妾の働が無効と相成るべしとて固く之を辭したり然るに先づ兎も角之を受て御試われよなど云ひ越したる者もありければ

妾が據て生き據て呼吸するこの慈善の事業を害する所の者を試み驗めさんとは恰も君が愛兒の胸に刃を當てゝ其親どさを試るが如くに候半妾が今日の暮し向につきては一つだも滿足せざる所無之ことし〳〵く皆な滿足に越したる事を保ち居候ぞや

とは答へたり

●小說

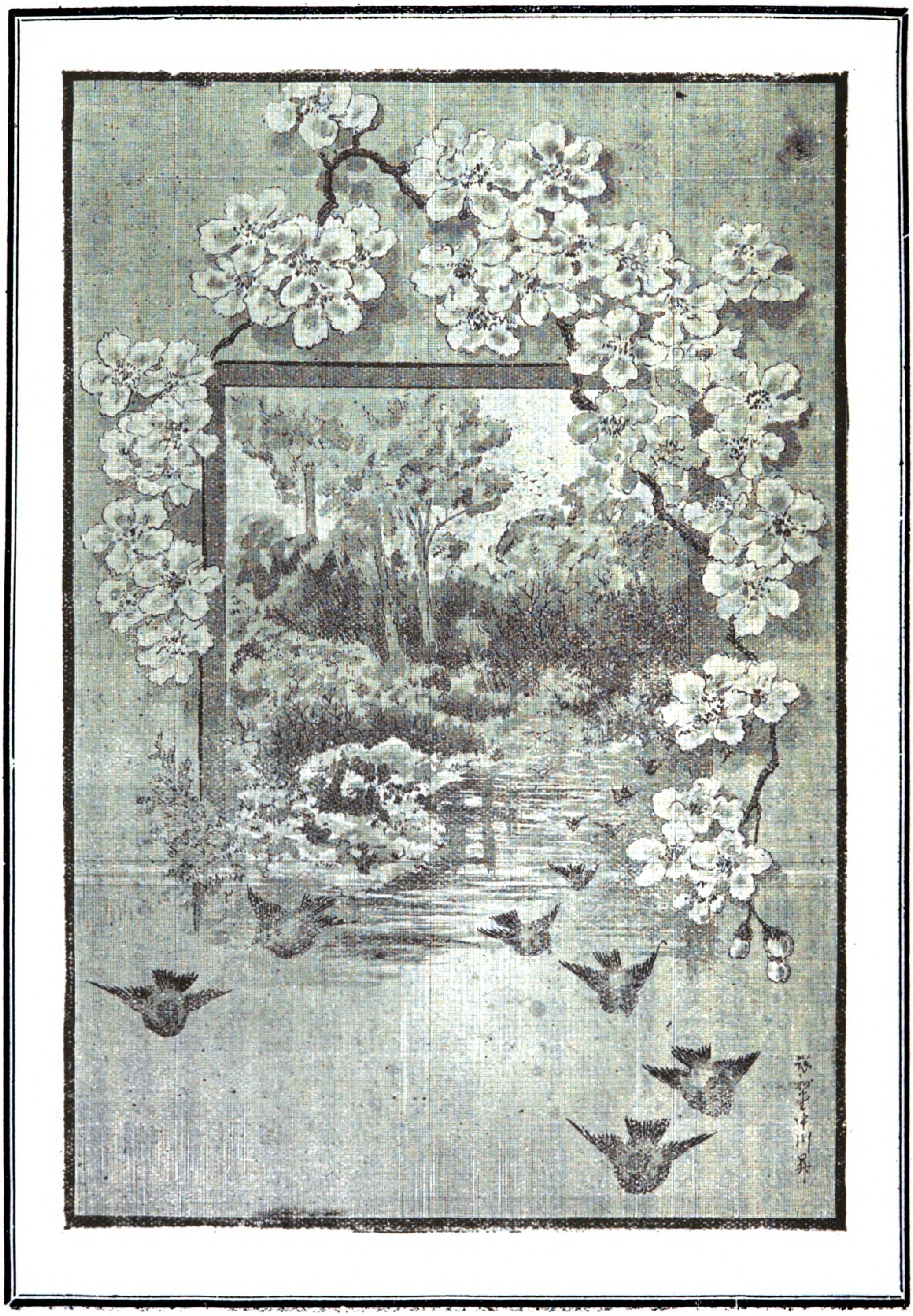
○薔薇の香　　月の屋　志のぶ

第三回　讀書の愛

青山哲は兼て女子教育の事に心を傾けたれば時々は東京横濱邊に在る女學校に參りて授業の摸樣生徒の有樣など視察することもありたり今日は府下の山の手あたりに立つたる或る女學校に參り例の如く幹事に委頼して授業室を一間ごとに巡りてさて最後の小さやかなる所に至れば玆には生徒たゞ僅かに三人して教師の釋解をば聞くと見へたり此時他の一冊を講じ畢りて亦更めて別の卷を取上げ今や將に講義を初めんとする時なり教師は青山に椅子を與へて會釋し乍ら

さて今日は廿九章でしたかな……之は昨日の所に續いて皇子皇女が婚姻の事に付て利害を討論さるゝ所であるが

ラセラスの言はるゝに凡そ全躰の上に善いと云ふのは即ち其一部分ごとにも宜しいと云ふとだが今若し婚姻が人間惣躰に取て最良の策であると云ふならば亦明らかに人々の上にも最良の處置であらんければならむ若し然らずと云はゞ即ち此のイツ迄も爲さねばならず且つ誰れも是非爲ねばならぬ所の人間の義務が人に害惡を來らするものゝ原因とな



つたる次第にて云はヽ或る人々が他の人々の便利幸福の爲に止を得ず自身の利益を犠牲にしたのであると云ふより外はない今ま汝ち即はちチカヤーが彼の婚姻と獨居との二つに付て孰れが宜ひか惡るいかと計られたる議論に付て考ふるに凡そ獨居よりして起つて來る所の不便利は先づ大抵是非參らなければならむ且つ是非參るであらうと思はるヽ所の不便利であるが之に反し彼の婚姻の有樣よりして起つて來る所の不便利なるものは云はヽ偶然に出來したもので而も隨分之を避くることが出來るやうなる不便利だと云はれませう　私の考では若し賢い用心を爲たり又互に相ひ仁惠の心を起したりなどしたらば即ち婚姻は幸福なるものとなるであらうと申す議論を以てよく心を慰ることが出來ます凡そ人間惣躰が一汎に愚であると申すことが即ち斯く一汎に不平苦情を言はする者の原因と爲つて居る程の事で（若し賢い用心をして婚姻をするならば決してソンナ心配はある者でないと云ふ譯だ）かの年未だ熟せざる比に情慾の望に强迫せられ乍ら判斷もなく前見もなく又双方の意見は投合するや否やお互の風は一樣であるや否や又た今ま婚姻をすると定めたる判斷は眞に正直であるか其感覺は眞に淸潔であるかと云ふやうなる事々を研窮もせず乍ちにして撰んだる人々が相ひ婚姻すると申さば之よりして失望後悔などの決果を起すは知れ切つたることでどうして其外の結果を起すであらうとは望まれませうや。凡そ此樣なる事が世上の婚姻に有觸れたる普通の致し方である御覽なさい少年や娘方が何か偶然の事で出で會ひましたり又何か人に誘はれて双方互に遇ひまして一寸目付を交はし挨拶を言ひ合ひ偖て家に歸ると早や互ひ互ひに夢見て忘想を仕合うと云ふ次第で其時心中の思を避け又その考を去らんとしても少しも其力がないよりして兩人とも離れてあれば何か容易からず思はるヽならんスルト之あらば若し一處に居たらば定めて幸福であらうと早くも決定する、ソコデ婚姻する、ト其後發見するものは即ち前に自分勝手で盲に成つて居るゆへに見出すことが出來なかつたる色々の者を發見する計りで夫より外に何か善い所を見出しはしない斯して一生を口論でツブシて仕舞ひ此の世の中自然をば亂暴にも非難計りすることでありませう。特に又斯く早う婚姻するからして後に至り親子の競爭と云ことが起る息子は父が世を棄つることを未だ望まない内より身代を得んことを要むるからして此二代の人々を双方一時

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に滿足さすべき場所がありません又娘は母親がまだ老ひ朽ち行かんことを望まざる中より花を開かんことを要むるゆへに一方は一方の人を置て己が志を計り滿足させたいと云ふ慾心を制することが出來ないようになるのである。然し苟くも正當にして其外にはないと云ふ樣なる撰擇に致さんとて利口に計るとならば是非とも細密に考へたり隨つては是非婚姻を遲くせねばならん故に此の細考と遲婚との二つを以て前に申したる如き色々の害惡をば確かに避けることが出來る凡そ若い時には雜多の樂もあり非常の愉快もあるものだから妻とし夫とする相手がなくとも十分よく暮らすことが出來る斯くして年を取る内にはその長い間に經驗も增し又考へも廣ろくなるからして色々と吟味もし撰擇もする爲に好き機會が多く出て參る（故に何んでも晚く婚姻する方が宜しひと云ふ譯で）但し此等の利益が先づ無いとして見ても少くとも次の一の利益は確にある即ち兩親と子供との年配が多く相違するように爲ると云ふ事之が確かにその利益である、とかく長々述られました。

スルト皇女チカヤーの申さるゝには、凡そ道理に訴へても分らず經驗に徵しても敎へらるゝことのないものは只だ之を他人等の報告に據つて知るより外はないが私は晚婚が別段ぬきん出て幸福でないと云ふことの話を聞たことがある然るに此は決して忽かせに爲すべからざる要用の問題であるからして私は此を彼の議論の精密なる智識の廣大なる而して其人の申す事は是非を定る時の投票に加ふるに價ひするようなる人々に話しました所が其人々總躰が決しまするには男にしろ女にしろ其の主義が最早や定つたる時分、習慣が最早きまつたる時分、友義も最早や兩方それ〴〵に固まつたる時分、其の一生も又最早準備の時代ではなく即ち法式を運らしてそれ〴〵の計畫を爲すと云ふ時分、及ひ其の心は將に起り來らんとする色々の見込を預想して自分ながら樂んで居ると云ふようなる時代、即ちかくすでに年も取つて何も歟も大抵確定したる頃に至て婚姻するは甚だ危難あることであると云ふことに決定しました、蓋し玆に偶然の導に隨て世の中を旅行して居る二人の旅人があらんに之をば雙方一つの道を行かするように變はらするは中々容易く出來ることでない又此迄の習はせに隨つて自ら樂んで居つたる所の道をば急に見棄てゝ仕舞ふと云ふことも中々常に出來ることではあるまい（即ち年取つたる者等が此迄の習慣を止めて一方

の好み通り一方の行ふ通に均うすると云ふは出來にくいとであると云ふ譯て）且又年若の頃ハ何も定らずに氣輕の者であるが之が最早チヤンとして規則正しい樣に定ると云ふと直に高慢と云ふ心が出て來て人に隨うと云ふとを恥づるようになる又頑固と云ふ心が出て來て人に抵抗するとを面白がるようになる（即ち晩婚の夫婦ハ互にコンナ心を持つて居ります）假令ひよし双方に愛し敬すると云ふ心があつて一方を喜バするとを望むと云ふ程であらうとも時が立つに隨つて必ず外貌の形をバ變化せしむる如く心中の情と云ふものも自然に向き方を確めて處置風にも直しがたい頑くなゝる風をバ生ずる者であるから晩年に至るまでに染込たる風をバ容易に破り去るとハ出來んトテモ一方の人の心に適ふやうに改るとは出來ないものである今それ自分の身持の進路を變へんと企つる者ハいつも無駄骨を折るとである即ちとても出來ないものであるが此の吾々に爲すとが中々六かしい所の者をバ何如にして致すとが出來ませうや到底晩婚の後双方お互の氣性に合ふように身持を改るとは出來んものと致さんけれバあらん、と斯う申されました。

歌師ハ穿つが如く刺すが如く一字一句も洩さぬやうにして偖て成るべくスラ〳〵と講釋する其辨滔々たり青山はほと〳〵感じ入り乍ち時々例の眼を据へてヂツト生徒等を見つめ又ガクリと首を下て吐息して聞入る又そろ〳〵と頭を上て再び生徒等を見るに其一人は何處にでか出會ひたるようありハテナ何處であつた人だつけと腹の內で相談を爲ながらヲヽ夫れよ此頃の天王寺の葬式で、ソウ〳〵、矢張りウカ〳〵然たるあの樣子で何如して此樣な議論が分るものか夫でもジヨンソンの著書を讀得る程ならバ先づ感心だが（此時彼の娘フツト此方を向く青山は急に顏を外向けて眼中の視點を其傍に射遣れバ他の一人の生徒を見たり）此人は餘程熱心と見へる時々眉毛に皺を寄せるのハア、理會し惡くいのか然し絕へず鉛筆で何か記號を付ける感心に勉強家ダナ、衣服も粗末である…ガ亂れた風もない、然し餘程氣鬱家で……アレは分るか知らん…

此時皇子は語を插し入れて、然しチカヤーあなたはその妻定めの際に起る撰擇上の主なる勵ましを私は忘れて仕舞て存ぜないかと思ハるゝでせう、ガ若し私が妻を要むるならバ第一に左の問題を自ら問ひませう云く其婦人は道理を以て導かるゝとを好む所の人であるや否や、ト斯う考へてから決するとでありませう

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ゐますると于ヵャー姫の答へらるゝに多くの哲學者が欺かるゝのは即ちあなたの樣なるとを云つて居らるゝ所の點でわります……

いゝ、哲學者と聞いて靑山は急に耳を立てゝ聞く此時時刻の鐘ガン〳〵

ア、モ、鐘が鳴ました恰度此で切りといたしませう

靑山は先づ椅子より離れ一禮して室を出で幹事局に行て今日の挨拶を爲し歸らんとす此時アナタよりもコナタよりも科業を畢りて運動場に出づるものあり數多の娘孃心地輕ろく戯れ合ひて櫻樹の下に遊ぶを見て

女も多く集つて見ると櫻より美しび所ろがある

と冷淡なる靑山哲は自語しつゝも出で行たり

●寄書

●文苑

鈴木弘恭大人　撰

新年

あら玉のとしのはじめのはつ日かげ

うこともなしにのどけかりけり　高塩のぶ子

海邊春雪

浪のはな散るかとみればいろなつむ

めさしかりてにあわ雪のふる　鶴　久　子

春月朧

銀河とよひのつきのうつれるを

くもると見しはかすむなりけり　土屋みね子

雨中蛙

春雨のふる田のつゝみよるゆけば

くづるゝばかりかはつ鳴なり　中島　歌子

梅雨久

名にも似ずみかさまさりぬ水無瀬川

波のいはこすさみだれのころ　古宇田淑子

同

たゆまなくのきの玉みつおとすなり

日をへてはれぬさみたれの頃　入澤伊勢子

待郭公

今よひこうはつね聞かせよほとゝきす

いたつらに待夜のみつもれば　高塩のぶ子

雨中郭公

さみだれの闇なくしふればやよしばし

笠やどりせよやまほとゝきす　土屋みね子

田氷

あしひきのやましした小田のましみづは

木の葉ながらにこほり初けり　同　人

朝氷

朝すゞりあらひしにはのみづたまり

うず盥なからこほりそめたり　松門三科子

朝落葉

夜のほどの風にはたへてこのあさけ

もろくも霜に散るもみぢかな　清水谷日珠尼

月

日の光りうけてかゞやくかげなれど

などみづいろに月はすむらむ　大野　定子

藥玉に添て人につかはす消息文　南部　繁子

このごろのかきくらしたるさみだれは。軒のしづくもひまなきを。いかゞ徒然にはしますらむ。一日ねあはせのことねもごろにのたまひおこせ給ひつれど。今日しもさはるふしありて。ゐまゐらぬいと口惜しう侍り。めづらかなるおほんもよほしなれは。いかばかりかといとゆかしうなん。さるは此のくすたまよ。緒だにみじかうて。いんでとなきおほんわたりの几帳ひかくらぶべき匂ひならねど。つれ〴〵のてすさびにてうじ侍れば。ながきねにうへてまゐらするを。これも然るくさはひよとみうなはしたまはゞ。いかにうれしうはべらん。近きほどに明闇まちねたらば。まうでゝめでたきおほんことのこまやかなるやうは。うけたまはるべうこう。あなかしこ

舟中納凉　河内荻子

わびしかりし梅雨もなごりなくはれて。照つゞく日影にいとゞしくあつさのあまりゆく頃。のきばの竹の露さへかわきて。わくらばにうちそよめく音もあつげなる夕べ。日もやゝ傾きたれば。凉しき風もや吹くと。そゞろにかどをいでゝ行ほどに。心しれる友ひとり二人あひぬ。いつらと問に。いと暑きにそこはかとなくなんといらふれば。あな嬉しおなじ心にもおはすかな。さはもろ共にとてかいつらねて行く。こゝは人の家居たちつゞひて。いとむつかしう凉しげもなければ。同じくは隅田川のみをさかのぼりたらん。少しはひねもすの暑さも流しつべく思はるゝを。いざたまへもろともにをとて。此のあたり近き小川より舟にのりて漕出つ。川のいとせばければ。行かふ舟の棹のしづくも袖にひまなく。舟さしあてゝ舟人らがはらたちのゝしるもかしがまし。やう〳〵廣き川にこぎ出れば。遠く吹きくる風の凉しうて。おなじ世ともおぼえぬ心ちするや。いつしかくれはてゝ。月はいとたかうひろき川原のくまもおちず見渡さるゝよ。行かふ舟のいとまなきふた國かけたる橋のかたへ棹さすもあれば。みをさかのぼりて堤のかたへたゞよわすも見ゆ。今様のこうた聲はやりかに諧ふは。うたひめをのせたるなるべし。三のを琴をらうがはしくひきたてたる。おのがしゝ心をやれる遊びも。たゞ此の川波によるなりけり。我どちはさるにははしきは好ましからねば。心靜にすゝまばやとたがへて川上遠く漕行くに。まれ〳〵見ゆる小舟のうちもいとしつまりたるは。同じ心の人や凉みすらんと思ひやられてゆかし。ゆく〳〵波にうつろふ月かけは。さながら我舟をしたひくる心ちして。さをのまに〳〵すゐさうの玉のくだくるやうに見ゆるもいと凉し。

すゞしさの水上までとさすさをは秋のさかひにいりやしぬらん。などいへば。

川原風そでにふかせてゆく〳〵も月人をとこあひのりにせん。といふに又一人。

つゝめどもたもとにあまる川風をいかさまにしてもてかへりなん。などかたみにうめき出たり。家なる人にはかうともいはでかりそめにたちいでたれば。いづこにとか思ふらんと思ふもをかし。三國のあたり。白鬚の森など。うち見あげてなほこぎゆく。近きころ此のあたりの何某のみ寺より。法のためみやこ鳥のかたをとうろに作りて。この川上より夜な〳〵火ともして下すが。いとおもしろしとて。すゞみがてらこの川原につどふ人いと多かりきと聞きつるを。ことしはまださる事もきゝしらぬを。年ゝの事ながらいまだ見し事もあらねば。此邊りにやなど語りて。

鄙なりし昔ながらの都鳥名におふみ代にあひにけるかな。

とすゞしくしうういへば。又

かゝるせにすみた川原の都鳥いかに凉しきうきねならまし。

といふに。みづからも

流れゆくかげだに見ねばみやこ鳥なみの枕もひとよかりてん。

など語りあふほどに。舟はいつしかまさきのあたりにとゞまりぬ。

●女學雜誌の解停をうれしみよめる

掛巻もかしこきみよのそうならのふみをまなびの道芝のたへてひさしくたち露に月のかけたにやとらねは光りをおほくよするなくかきくらしたるさみたれのうら晴わたり日のみかけ照らふ園にまた植るもじの林のしけり合ことはの花も咲いてゝ學の窓に匂ふうれしさ

さみたれにたへて久しき雲間より聲あたらしく聞ほとゝす

明治年二十七月十二日　岩代野澤驛　渡邊幸子

●東洋英和女學校閉校式祝文

頃は文月七日といふに期を終て遠きは古里に近きは父母の元に至らんとするに當りけふは閉校の式行はせらるとて敎へ子等の父母を始め四方の貴人等の此校に詣て來ましてかくは延〳〵數榮ねを與へ給ふはいと嬉うかたおけなき事になん蠢愚なる身にしあれどこぞの夏より此の學ひの庭に數まへられて日毎に勤めいそしめともとより才みぢかく心をそへて學ひの道は進み得ずあれとかくもさかんなるけふのまとひに逢ひ奉る事のいと嬉しうなんおのれ等廿年さきの少女なりせばいかでかゝる御惠にあはましや偏に此の大御代に生れあふそ身の幸になんありけるそも〳〵いにし明治十餘り七年といふ秋の末此の文の庭を新たに立られて大和の學ひのみならず西國海みはるけき國の言の葉をさへさづけ給ふものから此の庭年に開け月に榮ねてをしへ子等の數もいやまさりにまさりて學ひの科もいやかはりにかはりてをみな子のをしへ至らぬくまもなく慈母にも増る師の君のめぐみの露に生立て幾世の春を重ねらんみち〳〵の師の敎へ導かせ給へりし學ひの業を心にしるしてゆるがせにすましき事はいふもさらなる中にもまなびし事をひめをかず疾く用ゆべき事そかし開けし國の人ゝは學ひし事をひめをかず心の文を飾していさゝか道をしるとても世を益する事多かるとかや殊に婦女子の交際の敎深うして信厚く其あしらひの妙なるは吾國婦女の及ふ處にあらずとそこゝにいはんはおろかしけれと吾等はいやましに才をみがきまわる車のかた輪と成りおの子とともに國の爲め心の文を飾して花もみもある女子とならまほしうなんされとおみな子とあらんものはいさゝか物學ひたりともますらをとひとしく並に思ひほこりてかしこたちてすへきならぬ事業を思ひわきまへて身を收め家をとゝのふべき心を專らとし愛と信とをむねとし大御代のめぐみをいかで忘るへきとつたなき身をもかへりみすけふの榮の壽にかくなん

君か代のめぐみの露に若竹のふしもすなほにいや榮ねはや

明治二十年七月七日　三年後期生　德田春子

LOVE IS PAIN.

'Twas said of old, and still the ages say,
"The lover's path is full of doubt and woe."
Of me they spake: I know not, nor can know,
If she I sigh for will my love repay.
My head sinks on my breast; with bitter stribe
My heart is torn, and grief she cannot see.
All unavailing is this agony,
To help the love that has become my life.

Hitomaro.

●新報

○皇后陛下の詠歌　嘗て第五十八號の女學雜誌に皇后陛下御作金剛石の御詠歌を揭載したるが　社友中川永輝君りの雜誌を在米の根本氏へ送られたる緣に因り去五月廿六日發のユニヲンシグナル(米國婦人禁酒會の機關たる雜誌の名)に之を反譯して載せたるにより左に轉載す

As the heart of a diamond unpolished,
Holds beauty now hidden from sight,
So thy virtue, man, through affliction,
And trial is brought to the light
Be thou faithful each moment to duty,
Like the watch its true-moving hand.
And thy labors shall vanish before thee,
Till thy life-work shall perfected stand.

Water, how closely thou suitest
Thy form to the walls that surround,
So man, 'neath the power of influence
Ever rises or sinks to the ground.
Then choose thyself friendships ennobling,
And seek for hearts truer than thine
In virtue improving continue,
Their strength with thine own to combine.

○華族女學校　去十八日同校に於て小學全科卒業生へ卒業證書及び各級生徒へ修業證書の授與式を行はれ　皇后陛下行啓あらせらる勸學の歌の唱歌及び校長大鳥氏學期中の成績報告及び生徒德行奬勵の爲め懇々演說ありたり　勸學歌は高崎正風氏作歌奧好美氏作曲にて左の如くなりき

あだにすくすなけふの日を　けふは再びかへりこず
むだにくらすなこのとしを　ことしはまたとめぐりこず
まなびの庭につどひこよ　たゆまずつめやをしへぐさ

○橫濱山手共立女學校　に於ては去十四日夜和漢學卒業證書授與式及閉校式を行はる　卒業生七名にして悉く邦語の演說若くは和文朗讀を爲されたり即ち松本伊佐子は上流婦人に告ぐるの文、石坂美那子は自由を張るに女子も亦責任ありとの演說、湯淺糸子女學生の將來の演說、米澤峯子女學生の希望の文、田中三香子女子の本分の演說、土田恒子精心論の演說、松本伊登子本末を誤る可らずの演說なり此外鈴木光子は國の敵と云へる演說あるべき筈の處不幸の故事ありて歸國し欠席ありたり　編者も來會して傍聽したるが諸子の雄辨にはほとほと感じ入りぬ只だ最少しく漢語を省れたらんにはと思へる廉もありたりしとなり

○駿臺英和女學校　去る十五日は駿臺英和女學校に於て卒業式ありぬ此校は元とキダ孃の女學校と申し餘程前方より在りて久しく我國の女子を敎育せられたる所なれども校則の都合にて未だ一回だも卒業生と云へるを出さゞりしが　今年は初て早乙女孃最初の卒業生となられぬ　來年よりは引續きて卒業さるゝ方多しと云へり　偖て同日は鳥山牧師の新詩祝詩其外暗誦唱歌等もありしが　分けて感服したるは芝山孝女のフロレンスナイテンゲールの傳の英文及　英詩並に右早乙女孃の無言の感化の英文朗讀にてありき聞く　同孃はキダ氏渡來の初より就て學ばれたりと云へば凡そ二十年が程は英學を修められたるなり　其文章發音の明晰純潔なりしも亦宜べなりと思ひたり　編者も來會して之を承はり世上に此校の景況を知るもの甚だ少きを憾として如此く記するに至りぬ

○佛語女學校　同校は近來大に事務も整頓し殊に生徒も追々增加するの有樣にて去る十三日本年前半期の卒業試驗を執行せしに　何れも平生勉强の効現はれ一人として落第せし者なきのみならず受驗者中優等の褒賞を受けたる者多かりしと　又同日はベルタン夫人同令孃其他貴婦人數名の參觀あり　試驗終りて卒業證書の授與式を施行し式塲にて　鐘ヶ江校長の演說あり加ふるにベルタン夫人が女子敎育の事に付き懇切なる演說等ありて中々の盛式なりしよし

○東京慈惠醫院　同院の維持法に就ては同院の幹事なる貴婦人方が種々計畫盡力さるゝ由兼て聞及びしが　此程漸く之を永遠に維持する基礎も定まりたりと今其經濟の大要を聞くに　黙に同院を　皇后宮陛下御眷顧の下に置かせらるゝ事になりしに付き每年　兩皇后宮陛下より金六百圓宛即ち一ヶ月金百圓を下賜せらるゝ事となり之に同院會員より每月の收入金二百八十餘圓及び　從前有志者寄附金の收入其他此程更に募集せし醵金者の收入金六百八十余圓を合すれば　每月千六十餘圓の收入あるを以て右の內より每月同院の費用八百圓內外を支辨するも　尙二百六十餘圓の殘金あるに付き之を同院維持の資本として積立金と爲すの方なりと云ふ　又同院の一部ょ屬する彼の慈善會は固より慈善の一途に外ならざるも　自今開會する同會は一には會員の交際を親密ならしめんか爲め出品の多寡價値の高下に拘はらず　會員は勿論成るべく知友の人々をも勸誘して出品せしむる筈なりと

○慈善會幹事　來る十一月開會する婦人慈善會の幹事長は有栖川一品親王御息所、幹事は伯爵山縣夫人友子、同松方夫人滿左子、同大山夫人捨松、子爵榎本夫人多津子、伯爵佐々木夫人貞子、侯爵鍋島夫人榮子、子爵長岡夫人知久子、子爵樺山夫人登茂子、伯爵戶田夫人極子、公爵毛利夫人安子の諸夫人が特撰せられたるよし

○婦人衣服の時好　近來歐洲諸國にて婦女社會の流行一變し衣服其他の裝飾品に絹地を用ふる事となりたるより　我國駐劄外國公使幷びょ紳士の夫人令孃は皆歐洲流行に伴はれ絹服に改むる向あるを　萬事萬端彼國婦女の風俗を見習ふ我國の貴顯紳士の夫人令孃は早くも斯と承知して　絹服を新調さるゝ向多く府下の吳服商中にて素早き者は夫々織元へ注文せりと面白からぬ流行なり

○女子の職業　我邦の　婦人は常に其身を男子に托し此世を送るの習慣にて中には團扇の骨割、糸操等をなす者あるも心中恥る所あるが如き有樣なりしに近年來歐米諸國へ我國產の絹ハンカチーフの　輸出あるより京濱間の女子は勿論近在の女子まで其ハンカチーフの緣織をなす者多く昨今は中等以下の　女子は余程忙がしき有樣

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なり其一個の賃錢は尺六寸にて二錢五厘、尺八寸にて三錢、二尺にて三錢八厘位なれば手刪れし者は一日に五六個、不刪の者と雖ども二三個を仕上る所より先づ通常一日に十錢より十五錢の賃錢を得之を一ヶ月に積れば三圓より四圓五六十錢となり婦人の內職には至極適當の業にて大に男子を補ふの道開け追々婦人職業の進歩するに至たるは誠に賀すべき事なり

○妓風改良會　越前武生にては今度或る有志者の發起にて妓風改良會なるものを設立し月に二三回つゝ討論會を開くと云ふ今其發起者の說を聞くに唯り武生のみ改良を施すも他の地方に於て改良を加へざる時は如何程改良を加ふるとも知らず識らず習慣に復し難きものなれば各地とも處々に妓風改良會を設け互に聯絡盡力したしとのとにて近日現今の妓風は如何なる改良を加へて可なるやと云ふ題にて演說を開くよし同地よりの通信

○京都通信　二條柳馬場角の京都婦人愛憐會は今度規則を改め更に會員を募集するよし△當府立盲啞院音曲科教師糸谷妙德尼は此程祖先の五百年祭を行ひ追善の爲め同院音曲科の盲生にして貧に苦しむ人々へ單物地一段宛を惠與せしと△高等女學校は去る十五日卒業證書授與式を執行し翌十六日より八月三十一日迄暑中休暇と定められたり尤入舍生中特志滯校の者には教員が交る〳〵出校して數旬の日子を空しく費さしめざる樣取計ふと云ふ△當地にて表面より見れば女運の進歩日に月に上進し慈善會と云ひ錦蘭會と云ひ何と云ひ彼と云ひ隨分相應に女子教育の美風行はるゝが如しと雖とも是等は總て裁縫編物其他些々たる手術を慰み半分に學ぶものにして是より進んで眞正の地位を製作すべき普通教育の高度に達するもの〻甚だ僅少なるは實に嘆息の至りと云ふ可し云々(西京通信員報)

○愛知女學校　名古屋にては今度愛知女學校なる者を設け教科を分ちて本科撰科の二種とし本科生は修身、讀法、習字、算術、家政、英語、唱歌、圖畫、作文、地理、歷史、和洋裁縫、レース、造花、西洋洗濯等其他女子の心得となるべき技藝を授け撰科生は各自所撰の學科及び技藝を授け專ら優良なる婦女を養成する目的なりと而して本科生は尋常小學科を卒業せし者又は之に相當の資力を有する者にして年齡は十二年已上十六年以下なりと云ふ

○靜岡女學校　今度靜岡屋形町なる英學校の校主藤波甚助氏の主唱にて關口同縣知事の賛成を請ひ靜岡女學校なる者を設立する由其校舍は追手町なる物產陳列塲を其儘借受け教師は米國加奈太より四名の女教師を聘し而して該費用は地方有志者の賛成を仰ぎて之を支辨する方法にて目下市中の有志者を募集中なり

○婦人茶話會　新潟尋常師範學校女學部にては去二日午後一時より茶話會を開きしが當日來會の人々は婦人懇親會々長、同副會長、幹事、尋常師範學校職人、及其妻幷びに同女子部卒業生等合せて四十余名初め師範學校付屬小學校の女生徒に唱歌及戶外遊戲を爲さしめ次に女子部生徒の談話幷びに校長教員等の講談あり了りに同部生徒の調理せし茶菓の饗應ありて退散したりと同地よりの通信中に見えたり

○德島婦人慈善會　上田マサ牧岡キンの二夫人が今度題號の會を發起さる十四才以上の者は何人に限らず會員たるを得春秋二回に總會を開かれ每週金曜に會員集りて細工物を爲すべし等の規則ありと云ふ

○茨城婦人協會　去る九日水戶公園內の弘道館にて開會せし同會は出席百余名にて同日招聘されし演說者は尋常師範學校教諭越智直、基督教會員和田某の二氏なりし由又同會は來八九の二ヶ月休會し十月より每月定會を開く筈なりと同地より報

○札幌女子職業學校　同校は去る十日午後三時より開校式を施行せり當日臨塲の人々は岩村北海道廳長官を始め藤田、小野、佐藤の三理事官、淺羽札幌區長等にて岩村長官は簡單なる演說をなして開校を祝し三吉同校長は長官其他來賓に對し臨塲の謝辭を述べ且つ同校の後來に向ひ望む所を演說し夫より同裁縫教師のミシン使用の實試等ありしと同地よりの報

○海外女事

○婦人職業獎勵會　五月十六日英國倫敦ベル子ルストリートに於て婦人職業獎勵會の第二十八年會あり其時書記キング孃の報告に據るに婦人職業中髮結ひ活字書き活字植工校合等は大に增加せり又石版畵石版等の業も漸々に婦女を多く用ゆるに至れりとなり壯後フホーセット夫人其外の演もありて甚だ隆んなりしよし

○女の學位　紐育ニロプミヤ大學一百年祭に於て變に女流に呈送したる學位は下の如し即ちエルスレー大學の校長アリスフリーマン孃並にアメリアエドワード孃へ文學士をバッサル大學測量臺の長にして有名の天文學者たるアリアミッチエル孃へ博士を送りたり但し此のエドワード孃は此一ヶ年が程の內に三度び學位を受られ之は恰も其第三に當れりと云ふ蓋し其一はノルサムプトン大學より博士を其二はトペヲカ大學より哲學士を受られたるなり

○婦女の市政權　去九日の官報に米國カンザス州にて婦人に投票權を與へたりとありしが右は昨年一月同州の議員會にて婦人一千名の請願を基として協議を開きて遂に市政の投票權をふるとに決したるが過る四月の府知事警察官長等の投票には男女双方にて入札したり之に於て色々の評判あり反對の新聞は色々と惡口をも聞たるとなるが要するに意外の好景況を以て投票しアルゴニアと云へる都にてはサルター夫人を府知事に撰擧するに至りたり之を女を府知事に撰びたるの最初となす又同日の官報にカリホーニア州ストックトン府は婦女子を區長議員等にしたり云々とあれども右は少しく疑ふべき旨あり何れ後號に細述すべし

○大德育會第十五年會　は米國ボストンのマイヲアノンにて六月二日に開きたり同日改撰の役員左の如し

會頭　ケーテガン子ットウエルス夫人
副會頭　は十三夫人
記錄書記　ウイリアムニコルス夫人
通信書記　コッドマン夫人
會計　ボグル夫人
指揮者　令孃夫人二十三人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○鈴木弘恭大人著述○小中村清矩大人評

改正増補 **文法口授** 全一冊●一名和文獨案内 定價十八錢 郵税四錢

此書は文章家なる鈴木大人が多年諸學校の生徒に和作文を授業せられしを筆記したるものにて襲に出版したる所大に諸校の賞用を得たれば尚亦今般大人に乞ひ改正増補して古人の文章數十篇を巻尾に付し或は雅文を俗文に譯し或は漢文を和文に譯したる作例をも擧げたり然れば啻和文のみならず漢文を學ぶ人の和文を漢文に譯するにも大に益あるべし且女學校などに於て和文を學ばんとする生徒諸君の爲めには此に過たる良書なかるべし

●右文法口授は學校教科用の書籍に適當也とて發兌后一週日を經ざるに既でに **成立學舎女子部** 及び **頌榮女學校** 並に **明治女學校** 及び **長榮女塾** 等の **教科書** とありたり

田口卯吉君結髪沿革附録○和崎義路君校○巖本善治君跋 渡邊鼎君著

束髪案内 美製小本八十頁細圖入 定價十五錢郵税四錢

當今東髪流行の折柄其結び方不案内の婦人夥からず此書は本婦人に適する束髪二十餘種の結び方を丁寧に教へ一々細圖を附して親切に案内すれば何如なる僻遠の地に在りて束髪の風を知らざる人々も之に依て容易に自ら試るを得べし特に田口卯吉君の論文束髪會の規則其外をも添へたれば結髪改良に志ある人々は宜く一讀あるべし

通信女學 第一巻 第二巻 **再版成る**

右發兌後非常に需要多く二巻共に賣切の所其再版出來致候に付尚ほ需に應ずるを得べし○尚ほ第三巻去月發行可致處女學雜誌發行停止に付一社出版物の法律に依りて發行被差止候に付當七月末には第三第四兩巻を發兌すべし

女學雑誌社

東京新橋日吉町八番地

黒川眞頼大人閲幷序 **源氏物語講義** 鈴木弘恭大人講義 追々出版 廿六號迄の巻發兌

右本文ハ湖月抄初メ先哲ノ説明モ有レハ此書ハ専ラ文法ヲ仔細ニ論シ且本文ト雖モ湖月抄河海抄花鳥餘情其他新釋評釋玉小櫛等ニ漏タル説ハ黒川氏ノ考ヘ及ヒ自説ヲ擧テ容易ニ發明スル新説ヲ示サレタレハ實ニ古今未曾有ノ珍書ト云フヘシ苟モ皇國ノ文章ニ冠タル源氏物語ヲ一目セント欲スル諸君ハ此書ニ若クハ無カルヘシ

土佐日記讀本 全一冊 久米幹文 小杉榲邨兩大人序 鈴木弘恭大人標註 參考標註

此書ハ各學校ノ教科書ナレド其種類甚多クテ或ハ語辭ノ異同アリ或ハ傍ニ俗解ヲ附テ煩雜ナルモノアリ生徒諸君ノ常ニ憂ル所ナルヲ鈴木大人爲メ事ニ思ヒテ諸書ヲ校合シ悉ク訂正シテ本文ヲ一定シ異同ヲ首書シ文法ヲ標註シ小杉大人ト計リテ新説ノ圖ヲ巻末ニ付シタレハ讀者一目瞭然ニ了解スヘキ珍書ナリ實ニ土佐日記中ノ全璧ト云ヘシ諸君賢覽ヲ垂テ試ミ玉ヘ

東京本町丁口 **中外堂**

●**歐米男女禮法** 全一冊 定價二十錢

米國センソル氏著 東京インデペンデント記者源原一郎君譯 尾崎行雄、田口卯吉兩先生序

本書は當今歐米交際社界に於て非常に珍重せらるゝ良書にて其意たる凡そ坐作進退に中らざる者言語應對の都雅ならざる者化粧服裝の優美ならざる者を適指し貴女紳士の品格を高尚の域に進めんと欲するに在り殊に男女が一堂に會して交遊する時互ひに心得べき箴戒をも詳記しあれバ今日の日本社界にありて極めて適切の新書とも謂ふべし且つ其體裁はポッケットに藏め得べき小本の仕立たれバ何邊にも携帯に便なり世の紳士淑女請ふ愛讀あらんことを

東京日本橋通三丁目丸善書店●神田表神保町中西屋●京橋區南傳馬町一丁目叢書閣

小子儀今回出京赤阪病院ニ從事シ傍ラ自宅ニ於テ婦人及小兒科ヲ治療ス

赤阪區氷川町四番地勝氏邸内

三田村敏行

遞信省認可

●駒木根貫一郎先生編 ●板權免許

毛糸編物法

●洋綴頗美本全一冊。一千部限り女學雜誌の看客に限り特別大減價二十五錢●郵税十二錢●切手代用必ず二割增しの事●若金則日送本す●帽子涎懸巾着靴下薬物肩掛等に至る迄數十種の方法を記載せり

全國專賣所 大坂中の島常安橋北詰一丁西入北側 川井美津書店

オーガン并ニ唱歌教授廣告

兩國矢ノ倉倚堂ニ於テ每週火金兩曜日午后四時ヨリ親切丁寧速成ヲ主トシテ教授ス有志ノ方ハ入學アレ

○教育時論

第八十一號目錄 七月十五日發兌

一部金六錢 十部五十八錢 二十部一圓十錢

○社說○隨筆(第三)(杉浦重剛)○教育ノ折田彥市君演說(服部一三君演說)○理科。元形質中に含有する物科(承前)佐藤龜世譯。家作の事(爪生寅講述)○文藝 かおぶみ(伊藤平章其他數多○内外雜纂○報官○廣告

發兌所 東京下谷區練塀町十四番地 開發社

弊社此度左の諸氏の特約を辱ふし其論文を請ひて特別寄書欄内に掲載す(順序不定)

中村正直君 西村茂樹君 穗積陳重君 箕作佳吉君
島田三郎君 田口卯吉君 宇川盛三郎君 那珂通世君
ツルー夫人 ピアソン夫人 中島とし君 植村正久君
小中村清矩君 鈴木弘恭君

又歐米に注文せし女學に關する新聞雜誌悉々來着仕候に付弊後尤も必要なる論文は譯出して餘す處なくかつ海外女事の一斑を新報部内に設け最近の出來事を掲載報道すべし

女王雜誌。女學雜誌。家族叢誌。女子用書。婦女新誌。娘娥必携。少女雜誌。○此外ハーパースモンスリ、センチウリー、チートウクワン、ニクレクケツクマガジン、ハーパースバザールの類は從前の如く本誌に抄譯致す所に候

新橋日吉町八番地 女學雜誌社

發兌					
七月。	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
八月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
九月。	三日	十日	十七日	廿四日	
十月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日

定價			
一冊。五錢	郵税。一錢	(但府内無郵税)	
十冊。四十八錢	郵税。十錢	(同前)	
半年分	一圓十七錢	府外は	一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は	二圓八十六錢

廣告

一行 一回	(廿七字詰)	前金拾錢
同 三回以上		一割引
同 六回以上		二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものに限て一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載するに右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町巖々堂○東京芝西久保櫻川町萬春堂○東京神田區雉子町開々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新銀町眞明堂○同京橋區木挽町萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○東京本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○京都四條通小橋へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンポード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥平堂○勢州松坂家里初枝

發行所 本局 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

持主兼編輯 巖本善治

印刷 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku-Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tōkyō, Japan.

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY